

港湾産業研究会 編
(代表幹事 北見俊郎)

港湾産業活動の課題

柾 幸雄
(横浜市立大学)

横浜において昭和40年以来、今まで18年にわたり、実際に110余回におよぶ研究例会が開催され、地元の港湾産業界の第一線の人たちをはじめ関連各界の有能な士が、真にわが国港湾の発展を願って、現状を直視し課題に挑み、調査や研究の成果を報告し合い、討議し合い、支柱となる斯学の理論の深化に貢献し、斯界の進展に多大の寄与を為し逐げてきたのが、北見俊郎氏を代表幹事とする「港湾産業研究会」である。そして、その100回記念として企画され、研究会の中心的役割を担い、常に研鑽をつづけて来られた方がたの論文10篇が集収されているのが本書である。

序文に、「重要産業としての港湾産業」と題して、北見氏が筆をとり、巻末には、「港湾産業研究会開催記録」として、これまでの全例会における発表者と研究テーマが収録されている。この巻末の10頁におよぶ表を見ると、「地道な歩み」こそが研究会の存在を不動のものにしたこと、いわゆる港湾関連企業のみでなく港湾関連産業と港湾研究分野と、その両者の広範なことと、抱えている問題の多大なことに改めて驚かされる。そして、本書は会の成果のほんの一部分に過ぎないが、この会をここまで永続させ向上させてきた内部的要因としての、横浜の港運関連業界における勉強意欲に充ちた人材の豊かさとその結束の強さ、それに縁の下の支え役をしてきた事務局の方がたの努力とには、ただ敬服するのみである。

本書の主論文は、次に列挙する通りである。

1. 喜多村昌次郎（財・港湾労働経済研究所所長）：港湾における労使関係の課題
2. 田中英輔（三協運輸KK取締役）：一般港湾運送事業（一般一種・元請）の構成
3. 宮地光之（本間船舶作業KK社長）：明日の船内荷役事業
4. 和同会（代表者・吉岡明、横浜船舶作業KK取締役）：沿岸荷役事業の内容と展望
5. 松本好雄（ユニオン・パシフィック鉄道KK、在日代表・複合輸送担当）：国際複合輸送と海貨業
6. 宮本 敬（ユーロ・コンテナ・トランスポーティングKK社長）：海貨業からNVOCCへの脱皮とシベリア・ランド・ブリッジ（SLB）
7. 松木俊武（日本埠頭倉庫KK社長）：倉庫業の現状と今後の課題

8. 市川勝一（前全日本検数協会教育訓練部次長）：八十年代の港湾運送事業
9. 松橋幸一・森口 明・望月 吏（横浜港湾カレッジ教官）：教育と訓練の時代
10. 北見俊郎（青山学院大学経営学部教授）：「三・三答申」以降の港運対策と「港湾産業」の確立

喜多村氏は、長年の現業経験と研究実績とから、しかも経済理論を採用して自信をもって労使関係・労組問題の今日的課題を、基本から明快に分析し意義づけし対策を提示しておられる。「港湾の利用者」なる経済主体を注視し、それとの関係に能動的に取り組むべきであることを示唆されているものと受け止めたい。

田中氏は、港運業全般の内容と規定の見直しにはじまり、とくにいわゆる「元請」（一般一種）を取り上げ、現在の実態に即して、免許関係と業務内容を中心論を展開しておられる。激変しつつある当今、矛盾や不適合を露呈している現行の仕組みや基準が、斯界発展の阻害要因になっていることを、日頃の社業からも痛感されているものと理解したい。

宮地氏は、「船内荷役とは」ともいるべき事柄を、多角多面に解説され、生成期からの斯業の推移を巧みに整理されて明述し、将来への展望を導出されようとしておられる。企業の責任者として常に先を達見すべきであることを訓戒されているものと思う。

吉岡氏を代表とする和同会は、沿岸荷役とこの事業のすべての面について、分り易く説明されるとともに、それぞれの事項の問題の所在を指摘され、斯界の今後に対応すべき方途に言及しておられる。業界の積極的な姿勢を強調されているものと明察したい。

松本氏は、これまでの海貨業から、新時代の国際的物流の動向をふまえての、荷主のニーズに対応するいわば、より高度の海貨業のあり方を具体的に展開されておられる。今後の檻舞台になるであろう国際複合輸送についての諸問題、とくにこれへの海運企業の進出にかんする卒直な見解が有益である。

宮本氏は、表題のようにシベリア・ランド・ブリッジを中心にして、ソ連の関連部門の紹介などにも相当の紙面をあてて、ケース・スタディによる海貨業の今後のあり方ともいるべき鋭い指針にまで及んで論述されておられる。前記松本氏のものと本篇とを併せ読むことによって、港湾産業全体が重大な変革時の真只中におかれていることを今更ながら痛感させられる。

松木氏は、倉庫業の現状と動向ならびに対応策について、関連資料を添付し、広い視野から問題点を大胆に論じて、経営環境の変化にともなう斯業の危機を征服する方途を、多くの事例を示しながら展開しておられ、具体的で説得力に富んでいる。

市川氏は、本会事務局長の労を長期にわたってとられて来られたが、それだけに港湾運送業における内外の諸課題が、年月の推移につれて次々に起生し、それを克服して進展していく経過とその実態、その時宜に応じた本会例会の研究テーマなどに人一

倍の感慨をもっておられるはずである。港運業とそれを取りまく各界を広く考察されて、その大きな潮流の中で今後の斯業のあるべき方向を明確に提示することをされている。よく整理された書き方がわかり易い。

松橋・森口・望月3氏による論説は、たんに港湾関連諸企業における技術者養成の必要性や教育訓練の手法などを説いた一文とは異なり、格調の高いものである。現に教官としてその任に当つておられる港湾人としての3氏ゆえに実際の個別的具体例を通しての人材養成面の記述はもとよりのこと、むしろ教育者としての3氏の教育理念や世界観・人生観が活字の上に、また行間に読みとることができ、極めて有意義であり、それは、すぐれて前向きの姿勢で、かつ良識が昇華させたものであつて、教育効果を期待させるものである。

北見氏は、これまでの氏の蓄積から氏の持論をさらに発展させて、近年の港湾諸事情の解析を通して、真の港湾の近代化への促進的対応と、港湾運送事業から港湾産業へ、そして港湾産業の確立との必要性を力説しておられる。

研究会はこれまで、いく冊もの研究成果を公刊しているが、本巻は最新の研究水準を示す学術書であるとともに、内容が広範におよびほとんど港湾産業の全分野が網羅されており、頁数の制約が逆に記述の簡潔さをもたらして、入門書・教科書などに準ずる機能も果してくれるものと思う。研究会の今後のこと層の充実発展を祈念し、次期の成果刊行を期待したいものである。

(丘書房発行、1983年4月刊、A5版、206頁、定価2,300円)